

つながりの力で

BY THE FORCE OF THE CONNECTION



プロローグ伝書鳩

2012年1月22日、まだ少し寒さの残る大阪市役所ロビーで僕は、2日間"まだ評価の定まっていない実験的な取り組みを続ける"34組の関西各地のアーティスト、クリエイター他、様々な若手"表現者"達の活動を紹介してきた「伝書鳩フォーラムvol2～未来を考える～」の最終セッション、参加者全員で「未来を語る」の企画者、そして司会進行役として、その場に立っていた。(https://umeda.keizai.biz/headline/1242/)



あらためて今思えば、企画者としては「未来を考える」なんてテーマは、全員で共有するには広すぎるし、語るとしてはあまりに漠然としすぎる。もし今、過去に戻れるとしたら、ぐーパンチで自分自身を殴って"もう少し詳細に"と企画の練り直しを迫っていたかもしれないが、でも、やっぱりできないかな?とも同時に思う。

それはこの時、大阪市政の変化、橋下新市長就任に伴う事業の総見直しで、この「伝書鳩」が事業途中で終了する事がほぼ決まっていたからだ。(この2ヶ月後に正式終了)

そう決定された事自体が企画者として悔しくないかと言えば、そりゃ多少はそういった思いはあった。とはいえ"恨み節的"な執着を伴うものでもなかった。それでも"せめて最後の幕引きは大阪市のお膝元、この大阪市役所のロビーで、全員で未来を語る事で次を発信し繋げたい"そんな企画者としての意地を、この時の僕はテーマ「未来を考える」に込め、この場に立っていたからだ。

参加者には気づかれないように、精一杯明るく司会役として振舞いながら「これから始まる未来」を全員で語りつつ「終わりを迎える」これまでの伝書鳩の事を一人胸中で考える。

30才の時に"評価の定まった事にしか価値を見出せない"銀行員の仕事に疑問を感じて、家族や会社の友人たちに反対されつつ、2007年に大阪は黒門市場の中に仲間たちと「アトリエ輪音(わおん)」という拠点、そしてNPO輪音(わおん)プロジェクトを立ち上げて、逆に"評価の定まっていないからこそ、応援すべき"と「若手アーティストの支援」に「ライブイベントや展示、フリーマーケットの開催」などの"発表機会と場所"を作る事に取り組み続けてきた数年間の事。

そして2010年に、その流れで今度は大阪市のアートインフォメーション&サポートセンター「中之島4117」の企画委員として、同じように「若手アーティストの支援」を担当し、まずはジャンル、カテゴライズに拘りすぎて、横断的な交流機会が少ないのでは?と問題意識を感じ、この「伝書鳩」(この企画名には"ちゃんと相手のメッセージを受け取り、対話しよう"という想いを込めていた)と今度は「トーク&シンポジウム」企画を考えて、関西各地の創造的な活動を続けて

いる人達を広く"表現者"と定義して、新たに発見し、紹介し続けてきた2年間。

それぞれに「ベストを尽くせたか？」と言えば、今でも反省や改善点は数多く浮かぶ。それでも、過去という後ろに戻れない以上、未来へ、前へと僕も進むしかなかった。

ただ正直、この「伝書鳩フォーラムvol2～未来を考える～」が終わった時、僕は次に「何をすべきなのか」わからなかった。それより、2007年からの「アトリエ輪音」2010年からの「伝書鳩」と「若手アーティストの支援」をしてきた数年間の活動を無事に一区切りできた安堵感に包まれていた。

しばらくして「旅」にできる事にした。とはいっても自分探しや、ましてや休養の為ではなく「次に何をすべきなのか？」そのヒントを探す為に全国各地を訪れる事にしたのだ。それには、ちょうど「アサヒ・アート・フェスティバル(AAF)」という2002年から「地域とアートの架け橋」としてスタートした全国規模のアートのお祭りに団体として、個人として参加させていただいた事も大きな追い風となった。(AAF自体は残念ながら2016年度に終了)

このAAFで全国でアートで地域に関わる方達のプロジェクトを実際に目にする事ができたのと同時に、人的な全国ネットワークが必然的にできた事は貴重な財産となった。そして何より、言葉で説明するのは難しいが、AAFの運営自体が運営側都合による「一方的なトップダウン運営」ではなく、参加団体全てを新旧に関係なく、できるだけ平等に扱い「性善説の自浄作用」で毎年、公募団体の選出や開催内容を「全員で決定する事に挑戦している」事にも大きな驚きを受けた。

一方で、前年まで開催していた「伝書鳩」の経験で、大阪はもちろん関西圏の広くアート”表現”に関わる知名度のある「個人やプロジェクト」をそれなりに知っている自信があったが、そういった方々の事が一步、関西圏から出て全国の方達と話す「誰も知らない」事にも多少なりともショックを受けた。自分自身は「井の中の蛙」だとは”わかっていた”つもりだったが、それでも「伝書鳩」を通じて、活動発表者として関わってくれた人たちの事は自信をもって紹介してきたからこそ、彼らの活動が全国レベルでは「誰も知らない」事が単純に悔しかった。

そういった悔しい気持ちもあり、また東日本大震災の被災地を訪れた事で(特別な事が起きる前に)日常的な丁寧な対話の場を持つ事が必要と考え「住み開き511」と名付けた自宅兼イベントスペースで始めたのが”関西を面白くする100人を紹介する”を掲げて、様々な分野のゲストを毎月お招きして、10人前後の参加者規模で行う”小さな連続トークイベント”「dialogue for survive」こと「d.f.s」だった。(”生き延びる為の対話”と今となっては少し重々しく感じるタイトルになっているのも、この時期にスタートした影響が大きい)

そして、このイベントの継続開催を通じ、かつて開催していた「伝書鳩」の続きというか、同じく”評価の定まっていない活動にチャレンジしている”方達をまた新たな形で関西で、そしてyoutubeの動画配信を通じて全国に紹介し応援していきたいと思ったのだ。(もっとも動画配信自体は5年過ぎた2017年現在は”会話の自由度を保つ為に”中止している)



”評価の定まっていない”から往々にして「知名度は一般的には十分ではない」時もあり(もちろん、そうじゃない方々も沢山いるが)「イベント」と捉えると集客面で難しい事もたまには起きるが「そんな些細な事より」大阪市役所ロビー

から「場所を変えて」そして大阪市の一事業から自主事業と「運営の形を変えて」、そして「伝書鳩」から「dialogue for survive」と名前も変えて、学生から社会人まで、そして活動ジャンルも様々な方達を何年間も「発見し、紹介する」対話の場を続けている事には、それなりに目利きとしての拘りと小さな誇りをもっている。

この「dialogue for survive」で2017年9月現在まで紹介してきた80名弱の方を以下に紹介する（敬称略）

アサダワタル／ハナムラチカヒロ／吉田美奈子／金益見：きむいっきょん／新聞女：西沢みゆき／やまもとあつし／今井紀明／新田理恵（Lyie Nitta）／井手上春香／中脇健児／藤村滋弘／小笠原瞳／梅田梨江子／山田愛／タナカユウヤ／patch-work（村上史博、丸井康司）／小泉雪奈／若松瞳、Alan Chang／『下町レトロに首っ丈の会』山下香／三村 康仁／藤田祐一／『Kisssh-Kissssssh映画祭』実行委員／池田社長／吹雪大樹／momo irone（色音 桃）／辻村真依子／笠井友仁／菅谷富夫／福島真理子／奥井希／奥田エイメイ／増山麗奈／倉津拓也／さとうひさゑ／藤澤聡子／片上雅奈子／堀久仁子／衣笠収／前畑洋平／星野零式／宝楽陸寛／西尾孔志／上野信子／小西真由／泉英明／徐子雁（くーらちゃん）／大谷燠／川口加奈／高亜希／兼松佳宏／谷亮治／小城ルミ／伊丹谷大介／西川亮／堺達朗／佐藤啓子／小西亮／あおみかん／賀來 寿史／冢瀬 利之／滝本 章雄／飯野マサリ／武田緑／高田ほのか／池嶋亮／嘉村賢州／飯村有加／梅山晃佑／本屋プラグ／荒木 宏之／片桐 新之介／藤本遼

批評「CA関西」2013年→

「dialogue for survive」（そして伝書鳩）が15~20分間の持ち時間でゲスト達がプレゼンテーションを競い合う「イベント」とは違い、あくまでゲストを「発見し、紹介する”行為”に重きを置き、一方で内容については（参加者の終電を気にして）2時間以内なら「どんな形でもいい」と丁寧な対話と平等な交流の場としての「自由さ」を極力大切にしているとすれば、2013年から「それとは別の」コンセプトで始めたのが“つながりの力で関西圏の創造力を可視化する”公募形式のアワード「クリエイティブアワード関西（CA関西）」だった。

こちらは前述の「アサヒ・アートフェスティバル（AAF）」の「性善説の自浄作用」を暗黙の了解として、AAFの運営自体を毎年「参加者全員で」考え続け、変化し続ける、この「運営システム自体」を参加団体として、また個人としても毎年の参加プロジェクトを公募の中から選出する「選考委員」もさせていただく事で、言わば”外側と内側から”眺めた経験を「何かしらの形で」僕なりに消化し、関西圏に恩返式的にフィードバックしたいと思った事。

そして特に関西というか大阪で実際に”企画し実行している”「プロデューサー」同士の会話で僕の周辺でよく交わされていた”大阪はノリが良いというか、なんでもありのイベントができる自由さがあるけど「ちゃんと振り返ったりする」機会がないんだよな問題、固く言えば「批評の場の不在」に危機意識を感じていた事がきっかけだった（イベントをする事が悪いと言いたいわけじゃない。ただ、それとは別に自主的な形で”ちゃんと評価し、積み重ねて行く”機会も別に必要だと思っていたのだ。）

つまりAAFの「性善説の自浄作用」の運営及び「参加団体の選出方法」を参考にし、あえて”なんでもありじゃない”「批評の場」を有志達で創る事ができないか？と思い始めたのだ。そして、それを具体的な形にしたのが公募形式のアワード「クリエイティブアワード関西（CA関西）」だった。

ゼロからとなる初年度は、公募型のアワードをこれまで企画した経験がなく手探りの中、様々な他の公募型のアワードを参考にして、まず目指したのは「応募する人」「審査する人」「運営する人」それぞれにとって（継続していく為に）「負担が少ない形」の最大公約数。

つまり「応募する人（エントリー者）」はWEB（スマホ）からの「最小限の情報入力」のみでエントリーできるようにし「審査する人（審査員）」も負担が少ないように「エクセルシートへの数値入力」のみで完結できるようにし、また「運営する人（事務局）」自体も授賞式当日以外は「WEBのみの作業」で終了できる手軽さを目指した。

ありがたい事に、まだ形となっていない段階から「審査員」として何人かの方が無償にも関わらず気持ちよく引き受けてくれたり、また何人来るかもわからない中で縁活の方々が「授賞式会場」として「あべのハルカス近鉄本店 縁活ステーション」を無料提供してくれたのは嬉しかった。



そして迎えた2013年1月の授賞式当日、事務局の立場としてはエントリーしてくれた「全ての人を表彰したい」しかし、それだと「なんでもありになってしまう」板挟みの、そして初めて経験する（そして今でも続く）叫びたくなるような断腸の想いの中から“それでも”と公平に（＝当たり前の事だが事務局は公平性の観点から審査にはまったく関わっていない）コモンルーム中津で開催した一次審査発表で発表した、選出の10組の方々に登壇していただいた。

個人的には、他の何年も継続を重ねているプロジェクトを差し置き、初回のグランプリとして初開催の和歌山の野外映画祭「Kisssh-Kissssssh映画祭」が選ばれたのには正直、びっくりした。ただ、それと同時に、こうやって”「クリエイティブアワード関西」らしさ”みたいな「他のアワードとの違い」が自然に生まれてくれるのかな？とも予感した。

一方で、初年度終了後にいただいた「1位以外の順位を決める必要性はあったのか？」とか「どういった基準で評価しているのか？」などについては真摯に受け止めて、来年以降に改善しなければと思った。そしてそれも今でも続く話だが「クリエイティブアワード関西」で目指しているのが参考にした「アサヒ・アート・フェスティバル(AAF)」の”「参加者全員で」考え続け、変化し続ける”だったのでごく自然な事だった。

以下、2013年の結果を紹介する。

- 1位 Kisssh-Kissssssh映画祭
- 2位 神戸モトマチ大学
- 2位 まちライブラリー@大阪府立大学
- 4位 Cafe303
- 5位 木津川アート
- 6位 つくるビル
- 7位 株式会社ダブディデザイン
- 8位 サービスグラントで活躍するプロノワーカー
- 9位 銀聲舎
- 10位 病院xアートプロジェクト

創造力が僕らの武器だ。2014→

試行錯誤で何とか終えた初年度の「クリエイティブアワード関西」を終えて、2014年度の2回目の準備が始まる。何でもそうかもしれないが、一度開催して形をつくってからでは修正点を考えていく作業となるので、やはり初年度よりは「すべき事」が明確なのでやりやすい。

まず、開催を「続けていく」からには、何かしら時代性のあるキャッチコピーが毎年あった方が良いのでは？と考えて、2014年は安保法案の可決を巡ってデモ行進などで賛否が起きていた事を踏まえてつけたのが「創造力が僕らの武器だ」だった。これは今でも思う事だが、想像力、創造力どちらの言葉にしても、相手をちゃんとイメージできる事で、直接的に傷つけあう事が避けられるのは？そんな不戦の意味を込めていた。

そして次に「クリエイティブアワード関西」の運営システムを創る際に参考になった「アサヒ・アート・フェスティバル」自体にも企画としても参加、年数回東京で行われる活動発表の場にて、エントリーしてくれた方々の活動を紹介する機会を創った。この事で少しでも関西圏の取り組みを全国に発信できればと思ったのだ。

それ以外は、昨年開催したからこそいただいた意見を受けての修正作業。「1位以外の順位を決める必要性はあったのか？」に関しては、事務局内で検討する中で、この年はグランプリを含む5位までを表彰し、他に事務局特別賞を用意する形で修正し「どういった基準で評価しているのか？」に関しては、授賞式前に審査員をつとめてくれた方々による同テーマの基調座談会の時間を進行の中で設定する事で、その疑問を解消する時間を持つ事にした。

他には「クリエイティブアワード関西」の目指している（継続していく為に）「負担が少ない形」の最大公約数を目指している方向性とは違い「運営する人（事務局）」の負担だけを増やしてしまう形となるので悩みのタネではあったが、この年からあえて紙フライヤの配布、賞状の準備、そしてわずかばかりの賞金を用意する事にした。（＝運営側はこの時から確信的な赤字体制となっています）また、僕が備品として別の仕事で得た謝礼をそのまま充てて購入したのが赤絨毯、いわゆるレッドカーペットだった。これは突然”授賞式にはレッドカーペットがあった方がそれらしいのでは？”と思いついた結果だが、個人的にはこれはこれで視覚的な意味で「クリエイティブアワード関西」らしさとなっているのでは？と思っている。（また余談だが、授賞式でお渡しする賞状やトロフィーも事務局スタッフによる手作りが始まったのもこの年からでもある）



そして迎えた「まちライブラリー@大阪府立大学」での2014年度の授賞式。”ほら、やっぱり赤絨毯は良いじゃないか！”そんな会場風景に内心ほくそ笑んでいた僕はさておき。この年に関しては特に様々なジャンルの方がエントリーしてくれた印象がある。その事で、初年度がこれまでの僕の周辺の「アート」「デザイン」関係が多かったとすれば、この年はエントリー自体に関しても「より幅広く」おそらくは審査員の方々自体も「果たしてクリエイティブとは一体？」と悩む事になったのではないかと思う。

また2014年度のグランプリが個人としてのアーティスト活動以外にも様々なイベントをプロデュースしている”ハモニズム”こと小島和人氏に決定したが、これも素晴らしい活動をされている他の「団体」を差し置いての「個人」の受賞という結果だったのにも昨年の結果に続き驚いた。もちろん同時に2回目の開催を終えて、着実にこちらも”「クリエイティブアワード関西」らしさ”が定着しつつあるのかな。という嬉しい気持ちもあったのだけど、やはり正直、個人としては予想外の結果だったのだ。

以下、2014年の結果を紹介する

- 1位 小島和人 (ハモニズム)
 - 2位 チーム4.5畳
 - 3位 SPSきずなや
 - 4位 一般社団法人KYOTOGRAPHIE
 - 5位 おおさか閃き塾
- 事務局特別賞 日本玩具博物館

イメージの数だけ愛がある。2015→

毎年”変化し続けていく”としながらも3度目の開催となった2015年度の「クリエイティブアワード関西」で、ある程度の運営側としての大まかな全体のシステムは形として完成する事となり、”変化し続けていく”項目が限定されてきた。

まず「エントリー開始前」の8月以前には”今年の「審査員」をお願いする方の事務局としてのリストアップと確定”（それからの毎年の審査基準の審査員交えた意見交換、修正）「エントリー開始後」の8月～9月までには「クリエイティブアワード”関西”」と名称に関西とつくからには、できる限り関西各地でバランス良く開催したいと考えているからの”関西各地の授賞式開催会場候補の調査と決定”。そして「エントリー終了後」の10月は毎年のエントリー数に応じての”グランプリを含む得票上位者（＝ファイナリスト）の選出数の決定（各賞の設定）”の大きさは3つだ。

特に最後に関しては、「クリエイティブアワード関西」の目的が、WEBサイトのトップ画面に掲載しているように”公募アワードという形で「エールを送り続ける」事で”絞り込む”というよりは、事務局としても”なるべく多くの方を選出し、広く活動を沢山の人の人知ってもらいたい”と思っているものの、授賞式会場の使用時間からの逆算、あるいは”多すぎても、それはそれでせっかくエントリーしてくれた方のモチベーションを下げてしまうのでは？”と毎年、集計結果を見ながら、事務局内でも毎年頭を悩ませているのが実情である。

そういった葛藤の中で、初年度の2013年は10組、2014年度は15組とファイナリスト選出が次第に増加していく傾向の中で、結果、現在までにおいて最多の16組の選出となったのが「イメージの数だけ愛がある。」をテーマにした2015年度だった。

この年の受賞式会場は、別でこの場所の活用相談で関わっていた事も有り自然と大阪、本町ACDC2ギャラリーにて開催となったのだけど、当日は活動発表自体が音楽ライブあり、パフォーマンス有りで長時間であったにも関わらず、これまでになく多種多様で、また「笑い有り涙有り」の内容で事務局としても思い出に残る授賞式となった。



そして2015年度のグランプリ受賞者は「尼崎ENGAWAKA化」計画の皆様。今でこそ、この時以上に幅広く大活躍されている方々だけ「まだ活動を始めたばかりの」この時点で彼らの以降の活躍をおそらくは見越して、投票された審査員の方々には個人的には流石だなと頭が下がる思いもあり、同時に誇らしくも思った。そしておそらくは、このゼロから始まり、2013、2014と続けていた「クリエイティブアワード関西」が微力ながらも一つのインキュベーションの役割を担う事ができているのでは？と確信し、またある種の使命感を感じた瞬間でもあった。

以下、2015年の結果を紹介する

- 1位 尼崎ENGAWA化計画
- 2位 NPO法人もうひとつの旅クラブ「ご来光カフェ」
- 3位 緑橋文化祭実行委員会
- プレゼンテーション賞 NPO法人もうひとつの旅クラブ「ご来光カフェ」

4年目を迎える2016年度の「クリエイティブアワード関西」は3年目となる前年度で全体の形が定まってきたと内部で感じたからこそ、このままでは「変化し続ける事」への限界を感じた事、そして危機感を覚えた事から、あえて「これまでの事務局を解体し」新しい事務局体制にした。

その事で「これまで」の3年間を「外から眺めた上で感じた」新しい事務局から提案された「問題点」の改善に取り組む事にしたのだ。その1つが「クリエイティブアワード”関西”」と言いつつも、関西各地での知名度、認知度はまだまだ低いのでは？という事。そしてもう1つが、評価基準を「クリエイティブ」としている割に項目それぞれが言語化しすぎて、逆にクリエイティブではないのではないか？という事だった。

前者においては「関西の近畿二府四県の全てでプレ的な説明会を開催する」事で、その解消に努めるつもりであったが、他の事業とのスケジュールの兼ね合いから、結局は大阪、京都、和歌山の3ヶ所でのみの開催となってしまった。それでも、特に和歌山でのプレ的な説明会がWEBニュースにも掲載された事が、この年、2016年度での和歌山方面からのエントリー増加に繋がったのは間違いないと思う。<https://wakayama.keizai.biz/headline/652/>

ただ後者、評価基準に関しては、この年のキャッチコピー”『ワクワク』が止まらない”が示しているようにまだ言語化・数値化できていない活動を応援する為に「擬音語、あるいはオノマトペ的な表現で基準を設定する」事を検討したものの、結局は事務局内でも”かえってエントリーする人、審査員双方にとってわかりにくいのでは？”と意見が別れて、擬音語と従来までの評価基準を補足として併記するという、やや中途半端な形での消化となった。

そんな中で迎えた2016年度の授賞式会場は、縁を優先する中で偶然に大阪での受賞式が続いていたからこそ”今度こそ！大阪以外での授賞式開催を！”と個人的には密かに目論んでいたものの、大阪外の会場の全てと調整がつかず、結局はこちらも4年続いて大阪、今度は阿波座にある江之子島文化芸術創造センターとなる。

とは言え、そんな事務局内部の事情はさておき、昨年の2015年度のファイナリストそれぞれの活動発表の解釈が自由で音楽ライブあり、パフォーマンスありと個性的で印象的に残っていたが、またそれとは別の意味で、この2016年度のファイナリスト15組の方達は、いわば正攻法的にそれぞれに”素晴らしいプレゼンテーション”が多く、自身もそれなりに発表する役割を担う事があるからこそ”わかる”驚きがあった。（そういった意味で、純粋に当日の発表だけで結果を決定する”当日特別賞はこれまでにない激戦だったとも言えるかもしれない）



そして、この2016年度のグランプリ受賞者は「音遊びの会」。こちらはこれまでのグランプリの受賞者とまた違って、2005年に結成されてからじっくりと活動を続けている事を僕自身が知っていたからこそ、これまでとまた違う意味で嬉しく思った。あいにく当日はスケジュール的に他のメンバーが忙しい中、代理出席という形にはなったものの、後日にわざわざ送ってくれた「音遊びの会」の皆さま全員での受賞記念集合写真を見て、その思いはとても強くなった。

以下、2016年の結果を紹介する。

1位 音遊びの会

2位 しおや歩き周りの音楽会

3位 まちくさ研究室 重本晋平

当日特別賞 マキコムズ

さて、本年度の2017年度の「クリエイティブアワード関西」"じっくりしっかり"のエントリー締切まで後数日となる2017年9月 (<https://creativeaward.jimdo.com/>) ここまで、前半は2012年の「伝書鳩」から"対話"としては「d.f.s」、そして"批評"としては「クリエイティブアワード関西」にそれぞれ姿を変えつつも「評価が定まっていない」方々を応援する事自体は継承されているこれまでの"流れ"の説明を。

そして後半は特に多くの有志によって無償（運営的にも含めれば実質赤字）で自主的に継続され続けている「クリエイティブアワード関西」の「変化し続けようとしている」からの事務局のこれまでの"試行錯誤"をありのままの形で紹介させていただいた。これから"始めよう、続けよう"とされている方にとって何かしらの参考になっていれば幸いである。

また、このタイミングで一度文章に、なぜ言葉にしたのかと言えば「d.f.s」「クリエイティブアワード関西」がそれぞれ早くも5年目を迎えるにあたって、対話なので"全てを許容している"「d.f.s」。と批評なので"あえて断腸の想いで"選んでいる"「クリエイティブアワード関西」それぞれを「同時進行している意図」を整理し、言葉にして紹介しておく必要性を感じたからでもある（これについては、勝手ですが、少なくとも自分にとっては今回で整理できた気がしています）

そして最後に、今回のタイトルに「つながりの力で」とつけた理由を。これは特に「つながりの力で関西圏の想像力を可視化する」をテーマに掲げて続けている「クリエイティブアワード関西」を数年間続けていく中で周囲からかけられた「高額な賞金は出ないのですか!」とか「どういった直接的な"メリット"があるのですか?」へのこちら側、事務局からの問い掛けへの返事を込めてつけさせていただいた。（もちろん高額な賞金を出すのが可能ならその方が良いのも理解している）

かつて行っていた「伝書鳩」そして現在も続けている「d.f.s」「クリエイティブアワード関西」。その全てが経済効果としては当たり前前に微力であるし、そういった事への価値が優先順位として高い方に対し直接的な"メリット"を提供する事ができていないのは現状「確かに間違いのない事実」だとは思いますが。

ただ、それでも逆に、そして素直に問い掛けたい。では「伝書鳩」「d.f.s」「クリエイティブアワード関西」といった、この数年間にわたって続けられている自主的な有志のつながりによる、ある種のフリーミアムな非営利プロジェクトは、では「何も生み出せていないのか?」「意味がないものですか?」と。

ここで何かの結論を求める気はもちろんないが（それに"それぞれに違う"のが一番だとも思う）ただ少なくとも個人的には事務局としては声を大にして"それでも"言いたい「生み出せている、意味はある」と。この数年間「つながりの力で」多くの直接的な"メリット"はなくても、多くの「お金に変える事のできない」「言葉にする必要のない」財産を得る事ができたと思っているし、同時に、自分だけでない誰かの「笑顔を創る」事に"少しだけ"貢献できているのでは? 考えているからだ。



そして、それはチャーリー・チャップリンはかつて『行動を伴わない想像力は何の意味も持たない』（imagination means nothing without doing）と言ったが、でも今は「つながりの力で」そんな特別な「誰か一人」だけではなく「共に動き、共に叶える」クリエイティブシェア。そんな確かな意味をもつ未来を創る事ができると信じているからでもある。

うん。これからも”じっくりしっかり”頑張ります。まずは10年。

つながりの力で

<http://p.booklog.jp/book/117404>

著者：田中冬一郎

ワオンプロジェクト設立者／ファイナンシャルプランナー
／終活カウンセラー／素人作家。

目の前の誰かのセーフティネットになる事を目指し、
2007年にワオンプロジェクトを設立。他NPOのプロボノも

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117404>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト